えぬぴおん 第 2 号

特集
高齢期を豊かにする NPO 活動

体は元気な高齢者が家に引きこもっている。
それは、なぜ？
コミュニティとの“つながり”を作れないから……。
子育てや仕事人生が終わったあとの、
人生のグランドデザインが
確立されていないから……。

高齢期をもっと積極的に生きるために、
元気な高齢者が生き生きと暮らすために、
さまざまな NPO が活動を始めている。
今回は、そうした NPO や市民・企業団体などを
紹介しました。

# 高齢期人生のグランドデザインを確立したい

対談
NPO 法人シーズネット　代表　岩見太市さん
札幌大学経営学部助教授　佐藤郁夫さん

## 元気な高齢者にそううつ傾向が増えている

岩見　私、札幌で高齢者の介護や痴呆に関わる仕事をずーっとしてきまして、ある時期から気になりだしたことがあります。それは、介護を必要としている高齢者の裏側で元気な高齢者がたくさんいるのに、彼らが高齢期を積極的に生きているかというとそうではなく、どこか寂しげで不安を感じながら生きている方が多いことです。子育てや仕事人生が終わったあとの、人生のグランドデザインが確立されていない。これを確立しないと本当に豊かな高齢社会はありえない。元気な高齢者が生き生きと暮らせる社会はどんな社会だろうということで、シーズネットを NPO として立ち上げたのです。

佐藤　高齢者は今日の空のように「秋の空」という感じがします。すごく元気でも、ある日突然寝込んだりしてしまう。そういうことに気をつけて、元気を維持するのは大変なことなのだと思いました。

岩見　体は元気だけど、心の充実感が確立されていないのです。私のまわりでも、そううつ傾向の人が増えています。親や配偶者の死、親の介護など環境の変化が起きると、その変化に対応できずに沈んでいく。

## 高齢者の社会はプロシューマーが支える

佐藤　心の元気を取り戻すために活動のなかで気をつけていることは何ですか。

岩見　とにかく、家から外に出る、中に閉じこもらないということで、仲間作りと役割作りの二つのキーワードで動いています。家族を離れたら人間関係をどうつくったらいいのか分からないし、その場もない。隣近所とか地域の老人クラブはいやという傾向が出ています。そこを見据えて、新たな人との出会いをどうつくっていくかが問われています。

佐藤　シルバービジネスの現状を見ていて、高齢者関連のビジネスはプロシューマーの視点が必要だと感じています。未来学者のアルビン・トフラーが、プロデュース（生産する）のプロと消費者のコンシューマーをくっつけて、『第三の波』（日本放送出版協会,1980）の

なかで「近未来社会はプロシューマーが支える」と言っています。
　要するに、自分のやりたいことを選択できる社会になっていくわけですから、高齢者の社会はプロシューマーが担うようになるのです。こうした元気なプロシューマーをたくさん増やすにはどうしたらいいかを、最近考えています。

仲間づくりから役割づくりへ

岩見　私たちはいままでは、趣味グループによる仲間作りをしてきたのですが、これから役割作りに入っていきます。他の NPO の事業を見ていると福祉など提供側の論理がものすごく多い。ミッションというか、「やりたいからやる」という発想で地域のニーズに立脚していないのです。
　うちの例を申し上げますと、最近、「ほっと安心クラブ」がスタートしました。これは介護保険ではできない暮らしの助け合いです。これから力を入れようとしているのが、「シニア北海道ロングステイ事業」で、夏場本州では暑くて過ごせない人たちに北海道でロングステイしてもらうコーディネートの事業です。
　他に、ひとり暮らしの人への配食サービスをしていますが、考えてみればひとりで食べてもおいしくない。シニア会食交流事業として、みんなで食事する場を市内に点在させたいと思っています。
　いろんなアイディアが出ています。潜在化、顕在化している地域のニーズを吸い上げてシステム化していく能力がいま、ものすごく問われています。

佐藤　まさにプロシューマーですね。消費者と生産者の両面を持っている。高齢化社会はそういう社会だと思います。今までの福祉は「措置」の発想で凝り固まっていて、提供者側の論理が前面に出ています。そのへんはどう解決していけばいいでしょうか。

岩見　私は地域を歩けと。福祉ニーズは顕在化しないです。アンケートにも出てこないです。潜在化しているものを読み取る力が大事です。中間ユーザーのヘルパーさんや保健婦さんが一番よく知っていて、彼らとの会話からヒントが得られます。

佐藤　地域住民のニーズを読み取る人を育てることが必要ですね。

新しいコミュニティリーダー

岩見　今の人がなぜ、隣近所と仲良くならないかというと、もともと日本の社会はタテ社会でズーッときたのが、戦後の流れのなかで急激にヨコ関係を求める人が地域でも家庭でも増えてきているのです。が、ヨコ関係はだれか上手にコーディネートする人がいないと機能

しないからです。私はそういう人が新しいコミュニティリーダーだと思っています。こういう人をどう育てていくかは実はものすごい大きなテーマです。

佐藤　コーディネート役は女性のほうが向いているのですか。

岩見　そんなことはないですが、男性の場合、タテ社会にどっぷり浸かっているので、定年でヨコ社会に入ったときにどうしていいか分からないということはあります。ヨコ社会でつながっている専業主婦は、だれかいいリーダーがいれば、そのグループはまとまっていきます。ただ、今はヘッドシップだけでは足りなくて、本当のリーダーシップが求められています。今年１年間、コミュニティリーダー養成研修事業を行ったのですが、難しいです。個人の資質に負うところがどうしても出てきますから。

男を外へ引っ張り出すには？

佐藤　この前、微助人倶楽部（びすけっとクラブ）の人が言った言葉で、これは名言だと思ったのは、「男たちはどこへ行った」。実際、パークゴルフ場でもほとんど女性。仕事柄様々なところに顔を出す機会が多いのですが、例えば会合の場所でも元気そうにしているのは女性です。

岩見　老夫婦のお宅に電話すると、出るのはほとんど男性です。「奥さん、いますか」と聞くと「夕方まで帰って来ない」と。（笑）

佐藤　家に引きこもるのはほとんど男性ですね。どうしたら外へ引っ張りだせるのでしょうか。

岩見　うーん。いろいろやってるんですが、正直答えは見つかりません。老夫婦が非常に危機的だと思うのは、夫婦で出かけることをしないのです。とくに、男がいやがります。男が元気にやるのは、町内会や老人クラブなど行政からあてがわれたものですね。

佐藤　コミュニティビジネスの仕事で支庁にお手伝いに行くのですが、ネタはあっても担い手がいないのです。一番担い手になりそうなのは、漁師や農家のオカミさんです。

岩見　うちの場合、会員 700 人のうち 4 割が男性で、グループリーダーは男性の方が多い。現役時代からの意識の切り替えができている男性は、うまくリードできるし、バランス感覚もあります。ですから、地域に受け皿があればいいのですが、意外とないんですね。

加齢で磨かれる判断力

岩見　農家でも漁家でも今は子どもと別居してます。家庭分裂が起こっています。人生最後はひとりなんですが、それで全うできるかというとできない。ビックリしたのは、札幌の琴似に 300 室以上の巨大な有料老人ホームが建設されています。お金のある人が「子どもに迷惑かけたくない」と何千万円の権利金を払って、入る計画をしています。売り切れ状態といいます。こんな動きになってきたら、コミュニティに将来はないですね。

佐藤　NPO が盛んなアメリカの高齢者向け高級アパートで、おじいちゃんの元気な姿を良くみかけました。おばあちゃんたちの前でおじいちゃんが株式投資のレクチュアをしている。スペシャリストが結構いるのです。反面、日本の企業はスペシャリストを育ててこなかったですね。

岩見　まったくその通りで、日本ではゼネラリストばかりです。企業 OB で事業化すれば興味を示すかと思ったのですが、逆でした。考えてみれば、サラリーマンはあてがいぶちの仕事ばかりこなして人生を終えている。レールを敷く側に立つと、それが重荷になって逃げられてしまいます。

佐藤　大学の授業で学生に自由に考えみてと課題を与えるのですが、意外と若い人たちは柔軟な発想ができないです。頭が固い。50 代、60 代の方が柔らかい。彼らは戦後の荒廃も学生運動も知っていて、今の社会がいつまでも続くわけではないことを肌身で知っているから、柔軟な発想ができます。経験から出てきた多様な判断力は衰えず、むしろさらに磨かれる可能性があります。ただし、単調な生活を送ってはだめですが。

家族依存から抜けていない

岩見　NPO をやっていて感じるのは、世の中抽象論が多いことです。「福祉のまちづくり」「支え合い」「ふれあい」「高齢社会」も実感が伝わって来ないです。具体的なイメージを持てない。

佐藤　高齢者の社会といってもイメージしにくいですね。具体的でなければ対策も打ちにくい。また、高齢者の自信喪失も問題です。孫や子どもに尊敬される機会が少なくなっています。自分を主張し、発言する機会が必要になっていると思います。

岩見　老人の主張コンクールを 12 年前からやっているんです。最初はきれいごとだったのですが、だんだん「異性の友だちがほしい」とか本音で自己主張するようになりましたが、

まだ、まだ弱いですね。

佐藤　高齢者は家のなかで大人しくしているというステレオタイプに自分を封じ込めているのでしょうか。

岩見　それはありますが、根っ子は家族です。家族に頼ろうとする部分がどこかにあるので、トコトン自分でパーンといけない。家族依存から抜けた高齢期の生活スタイルができていないのです。自立していないと感じています。

問題はサラリーマン

佐藤　地域おこしやまちおこしに参加する仕組みが必要ですね。大成町は高齢化した漁業の町ですが、魚の養殖で高齢者に働く場を作ろうとしています。このように、働くことによって高齢者が自信を取り戻すことは元気なまちづくりにつながると思うのです。

岩見　私たちは、最初から事業化は無理なので、まずパークゴルフや「歩こう会」、マージャンクラブなど外に出やすいことから始めて事業化の方へ意識を向けてもらう 2 段構えでやっています。

佐藤　高齢者ベンチャークラブはどうですか。

岩見　ベンチャーで逃げますね。今さらそんなことに頭を使いたくない、苦労したくないと。

佐藤　高齢者市民農園でもいいと思いますが。

岩見　会報で呼びかけても男性は全然来ないですね。

佐藤　農村地帯では、建設会社の仕事が減って人手が余っているので、高齢化した農家の人たちからノウハウを教えてもらって、地域農業を盛り上げていこうというのが増えています。実際、農業法人ができています。問題はサラリーマンですね。

岩見　とくに、行政の OB は現役時代から地域と関わるのを避ける傾向があって、定年後行き場がなくなる。閉じこもり症候群の典型です。

集うからつながるへ

岩見　私は「福祉のまちづくり」は地域の人がどうつながるかだと思っています。「集うからつながるへ」と言ってるのですが、札幌みたいに人が集まってもつながりが持てないと何の意味もない。交わるためのしくみをどうつくるか。従来型のタテ型イベントをやっても人はついてきません。違う仕掛けをどうつくるかという視点が必要です。

佐藤　札幌のようなところは、付き合い方が難しいと思いますが、独居老人は確実に増えていき、ほっとくわけにはいきませんね。

岩見　シングルライフの交流会で「一人暮らしの悩みや課題を知ってもらい、一緒に考えよう」と市民向けのシンポジュームを行ったことがあります。一人暮らしの高齢者を福祉の対象としか見ないので、こうした講習会はどこもやってません。

佐藤　高齢者の 9 割が元気であるという認識がされていないですね。

岩見　体だけが元気では元気とは言えない。心身の充実感をどう持つかがこれからの勝負です。これは与えられるものではなく、私たち自身が試行錯誤でつくっていくしかない。

佐藤　年齢で輪切りして定年を決めるのもおかしいですよね。60 歳前にハッピーリタイアメントできる選択肢があっていい。選択肢がないから、定年後もあてがいぶちになる。定年で用済みだから、大人しくしないといけないと。

岩見　日本は何歳で結婚とか、そういう秩序がありますね。私なんか、8 回転職して住む場所も変えて、いろんな経験を積ましてもらいました。だから、まだ意外と頭が柔らかいかなと感じたりしてますけど。

行政の限界を打破していくのは？

編集部　行政の仕事をどんどんアウトソーシングしてもらった方が早い気もします。

岩見　というより、行政の仕事は公平・平等という大原則がありますが、この大原則ではもう市民を束ねられなくなっています。昨年から札幌で始まった福祉除雪ですが、行政がやると〈70 歳以上、身障何級以上、半径何 m 以内に子どもがいない〉といった基準を引きます。基準に該当しないが、福祉除雪を必要としている人はいっぱいいるのに、行政はそれを拾えないのです。ところが、NPO なら拾える。ニーズに応じて政策の切り替えをしていく時期が来ているとすごく感じます。ですから、行政は小さくならざるをえないと思います。

佐藤　生活介助をしている人の話を聞くと、一番大事なのはいかにうまく話を聞いてあげられるかだとおっしゃる。それを若い人ができて、一緒に外へ出ていくきっかけになれば、随分違うと思いますね。

編集部　若い人へのメッセージと受け止めました。今日はお忙しいなか、ありがとうございました。

いわみ・たいちさん
社会福祉士。中高年が新たな生きがいを見つけるための、仲間づくりを支援する NPO 法人シーズネット代表。

さとう・いくおさん
札幌大学経営学部助教授。外資系石油会社、北海道銀行を経て現職。ベンチャー、NPO が研究テーマ。

ばあちゃんも、じいちゃんも、るんるん楽しい！

美幌町　ふれあいコンビニば・じ・る

協同組合高齢者コンビニ・代表理事　稲垣淳一さん

　網走管内美幌町で昨年 10 月にオープンしたふれあいコンビニ「ば・じ・る」が高齢者を元気にするまちづくりの現場として評判を呼んでいる。原動力は魅力ある高齢者のマンパワー。くつろげる憩いの空間で、袖ふれあい、お茶をすすり、買い物をして、ときどき得意の技を披露して…。人が人を呼び、出会い、つながることの喜びに笑顔の輪が広がっている。仕掛け人の「協同組合高齢者コンビニ」代表理事、稲垣淳一さんにお話を伺った。

笑顔がひろがる憩いの場

　「ば・じ・る」の店の中は、まるで茶屋のようなくつろぎの空間。人気の秘密はあずましい囲炉裏と畳ベンチ、手作り和風のたたずまいにあるのではないかと分析。開店日は金・土曜日の週に 2 日だが、日平均 35 人以上の人が訪れるというにぎやかさ。
　店名「ば・じ・る」は、キャッチフレーズ「ばあちゃん、じいちゃんが、るんるんできる」が物語るように、町内の高齢者の憩いと楽しい交流の場になっている。来店すると、まず畳ベンチ（キャスター付）に腰かけてお茶を飲みながら、「ひさしぶりー。元気だった？」と声をかけあい、おしゃべりに花が咲く。
　フロアでは、地元農家が納める朝採りの新鮮野菜や食料品や衣類、雑貨の買物もできる。
　昼時は地元の美幌手打ちそば同好会会員の応援で打ちたて、ゆでたてのそばが食べられるという。最近はお汁粉メニューも人気。高齢者ならずとも立ち寄りたくなるお店だ。

元気な高齢者と共ににぎわいのある場づくりを

　北海道の小都市各地域では、都市部への人口流出、商店街の担い手の高齢化、店舗の老朽化、相次ぐ閉店…などでさびしくなっているところがたくさんある。
　どこもかつてのにぎわいを取り戻そうとまちづくり市民グループや商店主などが中心になって町の活性化に向け、抜本的解決策やアイディアを求めて必死だ。
　美幌町もまた、町民の憩いの場であった「びほろデパート」が九年前に閉店し、バスターミナルも移転してから、中心部は空洞化し、まちはにぎわいをなくしていた。当時のにぎわいを取戻し、高齢者も集まれる場所を創ろうと立ちあがったのが、地元の商店主やコンサルタント業者らで集った仲間たち。
　とかくまちづくり対策などでは、新しい施設や店舗などハード面でカバーしようとする

対策が多い。しかし、ハード面のすりかえだけでは、継続的なまちの発展にはつながっていかない。

そんな中、多くの勉強会や視察などを重ねた上で高齢者コンビニの組合員が出した結論は、「人が元気になることこそ、まちの活性化への近道だ」ということ。

「元気で時間のあるお年寄りはたくさんいる。商店街が主体的に関わりながら、その人たちと一緒ににぎわいの場を創っていきたいと思ったのです。」

健康・記憶・学びをモットーに

平成 10 年に稲垣さんらはプロジェクトを立ち上げ、ますます深刻になる高齢化問題に対し、その問題に真正面からトライしないと本当の未来は見えてこないと確信。町の中心部に高齢者も集まれ楽しめるコミュニティ店舗や助け合い住まいを設けたいと、それに向けた活動を開始し始める。

「高齢者・ひとが生きるために必要なのは〝パン〟のみにあらず。健康はもちろん、記憶（生活歴）。自己実現・表現が大切である」というように、人間は年老いても発達しつづけるものであり、自分が変化し活かされて生きることにも喜びがあるものだ。

メンバーたちは、そんな風に人が発達できる環境について学びながら、平成 11 年には道路を広場のように使ったふれあい市や、道路に畳を敷いてお茶会や炭火居酒屋を行った「畳イベント」の取組みを行った。

平成 13 年、こうした取組みが実を結び、事業協同組合が設立し、全国中小企業団体中央会の支援を得ながら、実験店舗『高齢者コンビニば・じ・る』がスタートした。

コンビニはコンビネーション　人と人とのつながりを宝に

今年 4 月からは、自力による本格運営がスタート。経営面での不安をよそに、町内外から健常者・障害者、老若男女と垣根のない人々の集まりが、自然に生まれてきているという。

今では、自主的にお手伝いさせてと名乗りをあげ、ボランティア店員となったお年寄りも 10 人ほどいるという。

元ケーキ職人だったおじいさんは、ばじるの一周年記念に 1m四方にもなる大きなケーキを作ってくれ、おまけに余興に尺八も披露してくれたという。他にも大正琴、縄細工、ミニ着物づくりと次々得意技が飛び出し、お手玉、剣玉と昔遊びの名人もいて、保育園の散歩で立ち寄って遊ぶ子どもたちの姿も見られる。

「初めのころは、組合員が一生懸命人探しをしましたが、今では自然に人が人を呼ぶというように素晴らしい人がどんどん集まってきます。お年寄りは町の資源、財産です。経験や知識、情報、もっている力をたくさん出してもらいたい。」

また、コンビニの名称については、単に「便利」という意味のコンビニではなく、「コン

ビネーション（つながり・連携)」で使うのだという。
　人との出会いは学びだ。人と人とのつながりはあたたかく、嬉しいもの。もやい、互いを活かしあい、つながりあうことは、『ば・じ・る』の生命線、宝だと感じる。

＊　＊　＊

　ところで稲垣さんは、本業の寝具店も 3 代目で、ずっと「ば・じ・る」のために飛びまわってばかり。先代から怒られそうと苦笑いの多忙な毎日。苦笑いしながら、今後の「ば・じ・る」の展開や夢についてこう語ってくれた。
　「1 階は、ふれあいこんびにば・じ・るで、2 階に商店主や家族が住み、3 階にはいろんな年代の人が助け合って住む公営住宅などがあって…。それは、大きな大きな家族が住む『家』のようなイメージですね。」
　高齢化社会にむけての先駆発信地として、手本にしたいと訪れる人があとをたたないという「ば・じ・る」。
　見学・視察大歓迎と笑う稲垣さん。百聞は一見に然り、温泉一泊、ば・じ・る付きでのんびり美幌を訪ねてみたい。

「ふれあいコンビニ　ば・じ・る」
網走郡美幌町字大通 4 丁目 19
問合せ・視察申込は
TEL　090・2696・3345（稲垣）
FAX　01527・3・3133

野幌縁側サミットとまち育て物語
物作りで楽しい縁がひろがって

野幌縁側サミット

　江別市野幌の中心、商店街の空き店舗を利用した交流スペース〝ほっとワールドのっぽ〟では、毎週月・水曜日に 20 代〜60 代の主婦を中心としたメンバーたちが集っている『野幌縁側サミット』が行われている。ミニ着物などの手仕事をしながら、縁側のようにわいわいと気軽に地域の問題やまちづくりを話題に語り合う。その活動が目指す社会的目標は〝まちなか〟での高齢者の住まいづくりと元気な高齢者づくり。有志として野幌のまちづくり活動を支えてきた「まちづくりグループ ACE」の白鳥健志さんと、縁側サミットの代表である安藤悦子さんにお話を伺った。

地域に住む人が自ら創るまちづくり

　札幌の隣町、江別市は現在人口約 12 万 3 千人。札幌への人口集中の影響を受け、野幌地区の人口も増え続けている。しかし、大型店の進出や今日の不況の中で、地元商店街からは客足が遠のいており、商店主たちも魅力的な商店街への夢を失くしかけていた。
　また、江別市では 2004 年度から「江別の顔づくり事業の主要施策である土地区画整理事業」が開始される予定があり、野幌商店街振興組合はこの事業に向け、自分たちの町について改めて考え直す必要にせまられていた。
　「道路や建物が新しくなっても、人がいない町、人と人との関係が希薄になったり、コミュニケーションができにくい町になってしまっては意味がない。」先の白鳥さんは商店街の人達に説いた。
　「野幌商店街も自分たちの力でまちづくりの新たな目標を決めて、その実現を図る必要があると気が付き、商店街や地域の住民、婦人代表、地元大学研究室、行政を含めたメンバーでまちづくり委員会を作り話し合った。この結果、野幌のまちづくりの大きな目標『高齢者も子供たちも安心して楽しく住めるまちをつくろう』が生まれた。
　白鳥さんはその委員会に関わると共に、別に有志で作る野幌のまちづくり協働の実践隊「まちづくりグループ ACE」の代表でもある。
　ACE のメンバーは、20〜50 代の学生や公務員など様々な職業の 15 名。その誕生は今からさかのぼること 2 年前、野幌で行われた「GOMI たちのメッセージ展」がきっかけだ。この作品展に参加したまちづくりに興味のある数名が結成したもので、グループ名は「Art Community Educate（みんなでワイワイ・ガヤガヤ、ものづくりしながらコミュニケーションを高め、お互いをよく知り合おうという意味)」の頭文字から〝ACE〟と名づけた。
　「私たちが活動の目標にしているのは、建物などハード優先のまち作りではなく、地域に

住む・暮らす人たちが自ら創っていくソフト優先のまちづくりです。そのためには〝地域に住む人・暮らす人のコミュニケーション〟が最も大切なのです。」と白鳥さんは言う。
　これまで、多くの人たちが出会い、話し合い、理解する機会を築くため、たくさんのワークショップや講演会、勉強会などを先の委員会をまきこみながら企画実践してきた。そうした野幌の一連のまちづくり・まち育ての学びのひとつに、三重県鈴鹿市で行われている縁側サミットがあった。

縁側サミットで楽しい場づくりを

　ぽかぽか陽だまりの縁側で、古い和服や帯をほどいて新しいミニ着物や小物を作る。お昼にはみんなが持ち寄ったご飯も食べながらワイワイガヤガヤ…これがまたとても楽しい。
　元祖縁側サミットの南部美智代さんを鈴鹿から招き、または実際に視察に行き、伝授していただく。
　鈴鹿の南部さんの住む町は古い瓦葺の屋根が並ぶ寺町。南部家にはひろい縁側があって、訪れる人は表玄関ではなく、みな縁側のある庭先からやってくる。子どもだったときに着たおべべ、母が若い時に着た着物、ハギレ…思い出の古着たちも、すてきなミニ着物や小物に生まれ変わる。それが、毎週水曜日 7 年間も続いているという。
　野幌でも楽しさあふれるコミュニティ作りをと、縁側サミットを導入。現在代表を務める代表の安藤さんなど、着物を縫えて縁側サミットを育ててくれる人材に恵まれて、野幌縁側サミットが始まった。
　昨年 11 月から始まった野幌縁側サミットは、毎週月・水曜日の 10 時〜15 時まで開催。参加費は材料費や会場の経費として一回百円。参加会員は現在 20 名、毎回ほぼ 12〜13 名が参加し、40 代後半から 60 代の女性が多いという。
　「ミニ着物の他に、巾着やトートバッグ、おちょこで作った針刺し、ブローチなども作っています。持ち寄った着物の思い出話をしながら、見せ合ったり交換したり、着物やハギレのやりとりやあそこの質屋にいいのがあったよとか、今度連れていってとかね、情報交換だけでも、すっかり場が盛り上がっています。」
　お昼は、持参したおにぎりに、安藤さんたちが作った汁物をみんなでいただく。お昼を一緒に食べたら、ますます親密度も高まってくる。
　「その日初めて来た人もお昼のあとには、もう何ヶ月も前から来ているかのように仲良くなっています。」
　安藤さん自身も、「ここは自分を飾らず楽しみながら自然に入っていける場所」と満足そう。9 年間、江別市の女性団体協議会や野幌地区婦人団体の役員を続けてきたが、それなりの緊張感や責任もあり構えてしまうことも多かった。縁側サミットでは、きどらず本音で語り、手作りで遊べることがうれしいと言う。
　参加者たちの作品は基本的には販売しないが、『ほっとワールドのっぽ』には、みんなで

いただく汁物の食材費や活動費の援助にと安藤さんらスタッフが作った作品がウィンドウに飾られ、売られている。
　今年春に江別市長がカナダに視察にいった時にここで手作りしたミニ着物を交流のおみやげにもっていき、非常に喜ばれたというエピソードがある。
　「今後は、私たちも高齢化して針に糸が通らなくなる日もくるかも知れませんし、高齢の方にも簡単にできるが横糸だけを通すだけでできるようにして、さき織りにもチャレンジしたいです。」

高齢者招き、食事会も

　どんなまちづくりを考えるときにも、安全・安心は欠かせない条件だ。
　野幌のまちづくり・まち育ての学習会の中に、同じく鈴鹿縁側サミットの南部さんが行う、DIG「災害イマジネーションゲーム」があった。
　テーブルいっぱいに野幌の地図を広げ、災害を想定する。「ここに一人暮らしのおばあちゃんがいるよ」「病院はここで、こっちの道を通ってこっちの避難場所に行くのがいいね」自分たちの町はどうなっているか、どんな人がいるか、いざという時は、誰がどこにどう助け合うのか、日頃の地域でのコミュニケーションの大切さをいたく痛感する。それと同時に、わがまちの人材、宝探しができることも発見した。
　縁側サミットで集う人は、「野幌のまちづくりに積極的にかかわる」「地域の課題に関心がある」など参加の条件があるが、その中でボランティアに関心のある人や地域の主婦らが新たなアイディアを出している。地域のお年寄りに向けたデイケアや、配食サービスなど高齢者福祉を軸にしたまちづくり活動への提案だ。
　その中のひとつに、ほっとワールドのっぽを利用した高齢者を迎えて行う会食会があり、地域のお年寄りにとても喜ばれている。
　彼女らの夢は膨らむ。「遠方に離れて作るのではなく、商店街の〝まんなか〟に地域の人といっしょに創る家庭のような高齢者福祉ホームを…。」野幌縁側サミットに未来型福祉のあたたかい夢が見えるようだ。

ほっとワールドのっぽ
江別市野幌町55　JR野幌駅から徒歩7分
TEL:011・381・2320
野幌縁側サミットの問合せ
TEL:011・385・4981（安藤）

少人数で「心安まる」
デイサービス「いきいき広場」の取組み

NPO 法人北海道たすけあいワーカーズ・ぽっけ　横野志津さん

活動を続ける中で

　少子化高齢化が進む社会の中、障害をもっても、住み慣れた地域で誇りをもって暮らし続けるためには、外に出ても誰もが集える場が必要とされています。
　97 年、札幌市清田区の生活クラブ生協の地区館を拠点に、組合員やたすけあいワーカーズ・ぽっけのメンバーを中心に発足したミニデイサービス「いきいき広場」は 6 年目を迎え、今年 9 月に NPO 法人ぽっけが運営するデイサービスとなりました。
　ボランティアの活動を進める中で利用者の笑顔に励まされ、将来私たちが受けたいサービスを今から提供したいと考えるようになり、少人数で多くのスタッフが関わり外出サービスを取り入れた現在のデイサービスのカタチができていきました。

「いきいき広場」のようす

　開設時から、清田区社会福祉協議会の後援で町内会にチラシを回覧することで利用者や、手芸の講師、ワーカーズメンバーの加入に結びつきました。
　現在、週 3 回（火・木・金）開設しており、毎回 50 代から 90 代の利用者 8〜10 名ほどの方たちに対し 12 名のスタッフと講師、地域のボランティアで対応しています。
　午前中の個別活動や外出サービスは利用者の意志を確認してスタッフやボランティアと共に活動しています。A さんは畳の部屋でおしゃべりをしながら縫い物を、B さんはホールで折り紙の講師と作品づくりを。D さんと E さんは男性ボランティアとマージャンをしたり、夏はパークゴルフを楽しんでいます。
　午後は全員で楽しめる企画（歌やギター演奏。気功、体操、おしゃべりなど）や季節の行事などが行われます。昼食も手作りで野菜を多く取り入れたメニューを心がけ、スタッフと共にテーブルは和やかな会話が生まれ食も進みます。

元気になれるデイサービスとは

　人は年をとっても障害をもっても、出かける場所があり、そこに会いたい人がいて、やりたいことがあることで充実した生活をおくることができるのではないでしょうか。個別対応のプログラムは、利用者各人のプライドと意志を尊重したきめ細やかなメニューを作

成することができ、痴呆症の方ばかりでなく、心のケアを必要とする方にも落ち着ける場の提供が可能になります。

　今年の 6 月と 10 月には、札幌市からボランティア研修生を受け入れ、活動を各地域に広げることができました。今後も地域福祉の充実を目指して前進していきます。

余裕教室を有効活用「広葉おたっしゃ塾」

NPO 法人北海道　たすけあいワーカーズ・どんぐり

学校余裕教室を使って生きがい型デイサービスを

「広葉おたっしゃ塾」は 2000 年 8 月、北広島市が外出する機会の少ない高齢者の介護予防を目的にはじめた生きがい型のデイサービスです。

市では、その開催場所にかねてより検討されていた余裕教室の有効活用を実現。社会福祉法人や NPO 法人に委託する方針を決定しました。たすけあいワーカーズどんぐりでは在宅の介護や家事援助の仕事を続ける中、いつまでも自分らしく生き生きと自立した老後を送るには家の中に引きこもらないで外に目を向けることが大切だと常々話し合ってきました。

そのためには歩いて通える身近な場所にデイサービスの施設があれば、それも地域に密着している学校の余裕教室が利用できれば、と考えていた私たちには待ちに待っていたものでした。早速委託を受けたいと手をあげ、様々な関門を通過して運営をしていくことになりました。

北広島市でも特に少子高齢化が進んでいる地域にある広葉小学校に、生きがいデイサービス「広葉おたっしゃ塾」は誕生しました。

現在は毎週水、木、金曜日と週に 3 回、午前 10 時から午後 2 時までの 4 時間あまりを各曜日 15 名、全部で 45 名の方が利用されています。午前中はどんぐりで計画した創作活動や趣味活動、軽スポーツなどバラエティにとんだメニューを皆で取り組み、昼食をはさんで午後は各自自由にゲームやおしゃべりで過ごします。

小学校児童とのふれあい

また、このほかに小学校の中にあることから児童との交流も積極的におこなわれており、毎年夏休み明けには 3 、 4 年生の児童を招いて夏祭りを開催。利用者がそれぞれヨーヨー屋さんやたこ焼き屋さん、くじ屋さんなどになり子どもたちに楽しんでもらっています。

また、先日は 6 年生の児童が平和教育の一環として訪れ、利用者が戦争中に実際に体験した話や感想に熱心に聞き入っていました。

そのほかにも市の福祉バスを利用した工場見学やお花見などの外出も大変好評で、次はどこにいきたいなどと次々に話がはずみます。

利用者の大半は「週に一度ここに来て、皆と会い、おしゃべりをしたり笑ったりするのが何よりの楽しみ、この日が待ち遠しい。」中には週に 2 回あるといいねの声もありま

す。週に一度きまって外出する場所があるということが高齢者にはとても励みになり、生活のリズムをつけることにつながるのではないでしょうか。

　3年目にはいった「広葉おたっしゃ塾」ですが、これからも地域に根ざし、誰もが気軽に集まり、豊かな人間関係をつくり出す場になるようメンバー一同努力していきたいと思います。

NPO法人北海道
たすけあいワーカーズ・どんぐり
〒061・1121
北広島市中央2丁目8-21　センタービレッジ821　1B
TEL/FAX　011・373・8166

高齢者は人生のエキスパート
積極的人生（ポジティブライフ）の応援を

インタビュー
会員制有償ボランティア組織　NPO 法人札幌微助人倶楽部

『微・助人（ビスケット)』。ほんの少しの手伝いで援助する人もされる人も満足できる。
ボランティアと大上段に構えずにできることを少しだけ、相互に分け合おう、そしてそれを元気な高齢者の生きがいづくりにしよう、そんな思いから始まった『札幌微助人倶楽部』も 1996 年から数えて今年 6 年目を迎える。平成 11 年には NPO 法人資格を取得。60 人で始まった会員も現在は 6 百人。年百人もの会員数を伸ばす会の魅力とは何か？
札幌微助人倶楽部の理事長であり、会を後押しする（株）C・W・E の取締役会長の作田和幸さんにお話を伺った。

会員相互の助け合いネットワークを

微助人倶楽部は会員制の有償ボランティア組織。会員登録は 18 歳以上。登録すると、サービスをすることも受けることもできる会員相互の助け合いネットワークだ。内訳はサービスを「提供する会員」と「提供される会員」、それと賛助会員で構成されている。
活動内容は介護保険対象外の家事援助サービス（掃除・洗濯・買物・留守番・調理・薬取り代行・朗読など）や介助・介護、そのほか、庭仕事・除雪・産前産後の世話・ベビーシッターなども受けつけている。
発足のきっかけをたどると、札幌微助人倶楽部の生みの親で、サポート会社である（株）C・W・E の設立にさかのぼる。（株）C・W・E は（株）パブリックセンターとコープさっぽろ、（株）ラルズを主要にした株主で、3500 万円の資本金、年間一億円強の事業高をもつ会社。
C・W・E とは、C（Children）＝少年少女、W（Women）＝女性、E（Experts）＝高齢者（達人）の略。21 世紀を支える 3 大パワーの活躍の場を開発し、活性化しようと立ち上げられた。その志を実現するため、まずシニアの活動に着手した。
「高齢者をエキスパートと呼んだのは、シルバーという暗い表現がイヤだったからです。人生 60 年過ごしたら、もはや達人。ところが実際、国の報告などを見てみると、高齢者の生きがいの場は、当時老人クラブやゲートボールしかないように見えた。高齢者のうち 85％は元気なお年寄りだというのに、そんなわけはない。これは、高齢者の生きがい活動をみていないなと思い、高齢者のソーシャルステージ、活躍の場をコーディネイトしたいと思ったのです」

有償ボランティアとしての微助人を

　C・W・E の当初の活動として、書籍『人生の達人』を出版する中で、札幌の高齢者の意識調査を行い、社会に対する意識の高さを見た。
　本書の中で、高齢者の生きがいについて日本全国のたくさんの高齢者にインタビューし研究調査を重ねてきた金子氏は、〝生きがいとは全ての世代に求められる「生きる喜び」であり、「高齢者の生きがい」づくりという昨今の福祉行政では高齢者は受身で認識されている。実際の高齢者は受身ではなくポジティブライフ=積極的な人生の実践者が多い〟と述べている。
　そんな中で、作田さんは高齢者の生きがいづくりの活動として、金子先生やさわやか財団の堀田力氏から有償ボランティアはどうかと勧められる。金子氏の言葉にあった〜ほんの少しの手伝いで援助する人もされる人も満足できる〜という〝微助人（ビスケット）〟という言葉を会のネーミングにして 96 年に札幌微助人倶楽部を設立した。
　「活動を通して、元気なお年寄りがよりいきいきと元気になっていくのが楽しみでした。元気なお年寄りがちょっと元気のないお年寄りを相互扶助する、それをどんどんバトンタッチしていく仕組みです。サービスをする人も受ける人と関わる中で、その人の人生にふれることができます。互いに生きがいをもらっているのですね。高齢者の方々は一生懸命で意識のレベルが高いですね。とても喜ばれています」
　サービスを受ける人はあらかじめ、サービスチケットを購入し、必要な分だけ使用していく。サービスを受ける人はサービス料 1 時間 700 円のうち、500 円は謝金となり、200 円は事務運営費となる。移動は別に運転ボランティア会員がいて、サービスを行う人を受ける人の家まで送り迎えしてくれる。

互いに支え合い、尊重しあって

　サービスする側とされる側のコーディネイトは事務局がする。作田さんが指をさしたホワイトボードには細かく日付の下に名前と時間が書きこまれている。申し込みは最低でも２〜３日前。
　在宅は家庭の中に入るということから、プライバシーを守る意味でも同区内の人や近隣の人を組まないようにしている。地図上に線を引いて、一番遠い人との組み合わせを考える。時間・場所・人・ニーズ・経験を踏まえ、一日最低でも 20 組〜25 組のコーディネイトを行う。これは大変な作業だ。
　「無償が主流のボランティアの中で、なぜ有償かとよく聞かれるが、ボランティアもお金を介在させることで、サービスを受ける人は頼みやすいというメリットがありますし、

サービスする側もやってやったというおごりの気持ちではなく、仕事という義務感で一生懸命できる。それが有償ボランティアの良いところです」

また、その逆も然りである。微助人倶楽部の活動が評判になると、口コミで育児支援、つまり保育所ではなく子どもを置いてちょっと出かけたいのでその間だけみてもらいたいといった要請がくるようになった。

行ってみると、中にはまるで便利屋さんのようにあれもこれもと乱暴に注文する人がいて、役立ちたいと思って頑張っているボランティアさんが自尊心を傷つけられて帰ってきたという例があるという。

「有償でもボランティア、家政婦業者やベビーシッター業者（プロ）ではないのですから、互いに支え合い、尊重し合うという気持ちが大切です」

ボランティアやNPOなどの〝社会的有用労働〟のすすめ

特集の高齢者をいきいき元気にするコミュニティのテーマに合わせ、作田さんに「人生のエキスパート」としてのメッセージをいただく。

「〝社会人有用労働〟という言葉を知っていますか？賃金・雇用の発生する生活のための労働とは別のボランティアやNPOのような活動のことを言います。アメリカでは、現役の労働者もだいたい3つか4つの社会的有用活動をしています。だから退職しても社会の役割を果たしながら地域でやっていけるわけです。

ところが日本の男性は、人生78年（平均寿命）とすると定年退職が60だとして、後の18年は余生の感覚で何もしないでいるからすっかりボケてしまう。男は肩書を喪失すると、何もない。無になっちゃう。名刺を出さないとつながりができない気がしているんですね。

その点、女性はどんどん横のつながりができ、友達づくりもうまい。そんな意味で、男性は女性に10年遅れていると言えますね。男性も、現職時代からこうした〝社会的有用労働〟に関わって定年後も濡れ落ち葉のようにさびしくならぬよう、生き生きとした人生を送ってほしいものです」

NPO法人札幌微助人倶楽部
入会金：5000円　誰でも会員になれます。学生さんは無料。1時間700円のチケット制で受給会員はあらかじめチケットの購入が必要。祝祭日・年末年始は割増料金、送迎・移送料金は別途
問い合わせ・申し込み：札幌市中央区北１条東１丁目　明治生命札幌ビル８Ｆ
TEL/FAX　011・241・9228
電話受付は月～金曜日の9時～17時

幸せを提供するふれあい事業を

NPO 法人　介護ホームどんぐりの家

　白老郡白老町、札幌から JR 特急で 1 時間。北海道の湘南といわれる雪の少ない温暖な地域だ。温泉付住宅が点在し、老後の住みよい地として移り住んでくる人もいるという。
　その白老町にちょっと話題になっている人気の NPO があるという。その訳とは？どんぐりの家事務局長の矢島正彦さんにお話を伺った。

マイホームのようなあたたかさで

　白老町の人口は 2 万 3 千人、うち 65 歳以上の高齢者が約 4 千人、高齢者率は 24％だ。同町の介護に対する受け入れ体制をみると、社会福祉法人系が 1、医療施設関係が 1 、介護福祉の NPO が 2 つ。その中のひとつに NPO 法人介護ホームどんぐりの家がある。
　外観から見るどんぐりの家は、クリーム色の壁に茶色の屋根。かわいいどんぐりを思わせる、マイホームのあたたかさを感じさせる建物。ヘルパーやケアマネージャーがつめている事務所の扉を開けると、食堂やくつろぎの空間が広がる。壁柱などの角は安全性と安心感をと、ソフトに丸みをもたせている。施設というより、むしろ大きな一軒家、グループホームのイメージが強い。
　訪問時、どんぐりの家では通所介護（デイサービス）のお年寄りたちが昼食をすませ、午後のゆったりとした時間をすごしていた。職員が手作りする玉入れゲームの手伝いをしたり、総合学習の時間で来た中学生と語らいの時をすごしていたり、自由でリラックスした時が流れている。
　その裏方の事務所では電話がひんぱんに鳴り、事務方が対応に追われている。現在、どんぐりの家のヘルパー数は 40 名（事務職含む）ケアマネージャーは 4 名、その他に地域のボランティア登録スタッフが 11 名いるという。

自分の理想、納得のいく介護を求めて

　どんぐりの家が NPO 法人として認証をうけたのが、2000 年 3 月。任意団体としての活動スタートは 4 年前の 98 年に遡る。
　当理事長、倉地栄子さんは他の社会福祉法人で勤務しながらも、胸につかえるものをずっと抱えていた。当時はまだ介護保険制度もなく、利用者への介護に関してはその施設ごとに色々な規制があり、しばりの中での介護という仕事に限界を感じていた。
　『これはもう民間ベースになって任意団体でやる方が自分の理想、納得のいく介護ができる。ニーズに答えるには自分の手で行うしかない』

倉地さんはそう判断して社福をやめ、一般の民家でヘルパー、看護婦など有資格者の仲間と任意団体で託老所をスタート。介護保険開始後はお年寄りのニーズも考えて、介護保険も導入。庭をとっぱらい、外にプレハブの建物を作って、事務所、訪問看護スタッフスペースを作った。

しかし、地域のお年寄りの評判もよく待機希望者が多い中、よりよい介護機器、活動拠点などハード面の充実を図ることが不可欠となり、現在のどんぐりの家の建設に踏み切る。

介護機器等設備及び福祉車両関係は、各財団（社会福祉・医療事業団、日本財団他）の助成金により完備される。しかし、建物に関しては、当初行政からの助成金も考えたが、官に頼っていたら時間が掛かりすぎ利用者に待ってもらえない。

それならと、土地は自力で買い、担保は自宅とした。返済の目処をたてて、室蘭信金から実績と返済能力ありの信用をもらい、融資を受けた。今年 6 月完成した新どんぐりの家に移転。「訪問介護」「通所介護」「ふれあい事業」の 3 本立てで事業をすすめている。

NPO としての「ふれあい事業」が喜ばれ、認められて…

どんぐりの家の事業は、小規模多機能型在宅支援事業といい、内容は前述した介護保険による訪問介護、通所介護、ケアプラン作成、そのほか NPO としての活動として介護保険外の「ふれあい事業」があり、託老所・在宅ヘルパー・移送サービス・お泊まり他介護保険の枠にない様々なニーズに応えるサービスを行う。

どんぐりの家の人気はこの「ふれあい事業」にある。利用者にどこまで満足してもらえるか。介護保険という国民全体が負担する仕組み、福祉の公平という規制付き介護メニューの中では、各個人のニーズをクリアさせることは難しい。

「例えば、介護保険の禁則に窓拭きおよび大掃除的なのはだめというのがありますね。あるおばあちゃんは、毎朝ベッドのそばの窓から登校する子どもたちの姿をみるのが日課になっており、それがとても楽しみなんです。見えなくなったらさびしい。ちゃんと拭いてあげたいじゃないですか。」

矢島さんの言葉は、利用者や現場ヘルパーの気持ちの代弁のようでもある。さらに時間厳守に対していえば、介護が途中である場合、 5 分前にお漏らしをしてしまったらそれを放って帰れるだろうか…。どんぐりでは、 5 分ないし 10 分ですむ内容の場合は対応するという。

「本当の意味でのニーズを満足させるためには、100 という枠を越え、利用者の立場にたった 105 以上のサービスをしなければ、足りないということです。私たちへのニーズが増えるのは、NPO というボランタリーな部分でそれができ、喜ばれ、認められてきた結果なのだと思います。」

介護認定を受けていない、受けたくない人への介護サービスや介護保険対象外の依頼事には、病院間の通院、窓拭き、草刈り、お墓参り同伴など実際介護保険では NO といわれる内容のものに対応する。また、家族が外泊等の場合も、高齢者の方の預かりや家で一緒に留守番するなどのサービスも行っている。

他の福祉団体で断られた人が、どんぐりの家を頼みの綱とやってくる。自分たちが断ったら「目の前にいるこの人たちはどうなるのだろう…」頼まれると「イヤ」と言えない見て見ぬふりはできないどんぐりの性格。人としての情や心のあたたかさ、それこそがみんなの望んでいるものなのではないだろうか。

利用者の増加は、宣伝や募集によるものではなく、利用者の口コミによるものが多いようだ。事業内容の実践と信用の積み重ねが好評を呼び寄せるのだ。

北海道の NPO の約五割が福祉介護系の NPO だというが、当初ミッションとしてそれぞれがもっていた高齢者福祉やまちづくりなどの志も介護保険事業に依り、気がついたら事業を中心に担っている NPO も少なくない。なんのため誰のための NPO なのか、もう一度ミッションを振りかえる必要があるだろう。

NPO 法人介護ホームどんぐりの家
白老郡白老町萩野 310-112
TEL　0144・83・4240
FAX　0144・83・6640
会員数 43 名　従業員 40 名
職種員数　1 級ヘルパー 3 名、2 級ヘルパー26 名、介護福祉士 1 名、社会福祉士主事 2 名、居宅介護支援専門員 4 名、看護婦 4 名

## 高齢者生協　仕事おこしで生きがいづくり

「元気な高齢者がもっと元気に！」と全国各地の高齢者生協が、仕事おこしやまちづくりへとその活動の幅を広げている。自分たちでつくった野菜の販売、葬祭の生前準備、朝市や養鶏、製塩……とその内容はバラエティに富んでいる。でも、共通しているのは、組合員がやりがい、働きがいのある活動を見つけ、高齢期を豊かに生きていることだ。

### 朝市で人気の「こだわり卵」

和歌山県高齢者生協（組合員 550 人）の有志が始めた養鶏「コッコプロジェクト」。近くの農家の協力を得て、和歌山市内から約 1 時間の桃山町に手作りの鶏舎をつくり、300 羽の鶏を平飼いしている。 1 日 250 個の卵を出荷し、会員や障害者福祉施設、朝市などに４個入り 100 円で販売している。えさや飼育にこだわるその「こだわり卵」が朝市などで人気を呼んでいる。

「コッコプロジェクト」に参加しているのは、60 代の組合員 10 人。養鶏の経験が全員なかったので、有機農業をしている近くの農家の協力を得て、事業を始めた。

えさはとうもろこしや魚粉、雑穀などを配合した市販のもので、抗生物質や卵の発色剤は一切使わない「安心、安全の卵」。水は雨水を溜めて利用し、鶏舎のなかを清潔に保っている。こうした作業は、和歌山市内に住むプロジェクトメンバーが交代で鶏舎に通い、おこなっている。「コストも手間もかかるが、良い卵を作っているという自信が、みんなのやりがいになり、活力の源になっている」という。

同生協は天然塩の生産・販売も行っている。焼却炉メーカーに勤務していた東原史郎さん（72 歳）が、試行錯誤を経て、自宅の庭に海水の水分を蒸発させる塩製造機を完成させた。現在 5 人の組合員で塩の生産に取り組んでいる。 1 日の生産量はわずか 2 キロ程度、売上げも 5 万円足らずだが、天然ならではの滋味が地元で評判。「お金より、一生懸命つくったものを、人がおいしいといってくれることが何より」と語っている。

### 産直の店「ゆい」

高知県内で、野菜や手作り果実酒などを販売する産直の店「ゆい」。ここで売っている商品の大半は、高知高齢者福祉生協の組合員が家庭菜園などでつくったものだ。野菜を持ち込む組合員は 50 人ほど。市価より 2〜5 割ほど安くし、売上げの大半は組合員の取り分。昨年度の売上げは 1500 万円を超える。無理をせず参加できる仕事づくりで、生活にも張りが出ているという。

### 葬送の生前準備も

兵庫県高齢者生協は、「元気なうちは働こう」を合い言葉に、ハウスクリーニングや庭園管理、住まいのリフォームなどを行っているが、ユニークなのは神戸支部が行っている葬送の生前準備や施行。本人、家族の希望や個性を生かした「自分らしい葬祭」を明瞭で納得のいく費用で準備したいといった要望に答えて、独自に「葬儀アドバイザー」の資格を設け、相談に乗っている。アドバイザーの一人は、元仏壇メーカーの役員。同支部では、アドバイザー養成講座も開いている。

高齢者生協は労働者が出資しあって事業を展開する日本労働者協同組合連合会が提唱したのが始まり。95 年の三重県を皮切りに「高齢者協同組合」が各都道府県に誕生した。介護保険施行を機に生協法人を取得する動きとなり、「高齢者生協」は全国の都道府県に広がった。最初は、介護・福祉事業が主だったが、仕事おこしやまちづくりなど活動分野を広げ、雇用情勢の悪化などから中高年の雇用の受け皿としても注目を集めている。

地域の高齢者の健康をサポートするドラッグストアー

―ツルハドラッグの新しい取り組み

インタビュー
株式会社ツルハ総務部長　大船正博さん

　道内や道外に全 350 店舗あるというツルハドラッグは、今年 8 月にツルハ医療介護サービス協会を設立。全道の 534 の病院、施設と協力関係を結び、連携した高齢者医療介護サービスへの取り組みを始めた。
　「薬局として単にクスリや品物を売るだけでなく、医療や介護サービスについても気軽に店先で対応し、お客さまの細かな相談にのれるお店作りをしようという全店あげての取り組みなのです。」
　そう語るのは、株式会社ツルハの総務部長、大船正博さん。在宅の高齢者や家族には、介護保険制度や、福祉サービス、福祉用具、住宅のバリアフリーへの改修など、なかなかきちんとした情報が伝わっておらず、利用方法やしくみ、様々なサービス内容が実はよくわからないという人が多い。
　いちいち行政に聞くのはためらわれるし、足は向きづらいもの。どこで？何から？聞けばいいのかもわからない。そんな時、いつも買物に行く近所の薬局で、気軽に相談できたらどんなに便利でうれしいだろう。
　こんな市民の気持ちに応えるようにツルハでは、福祉介護ケア用品も積極的にとりこみ、さらに道内の全店 200 店の店長以下スタッフ従業員に対し、介護や福祉についての研修を行い、お客さまの様々なニーズや質問に答えていこうと「介護相談事業」も行っている。
　札幌の東区のツルハ本部には、指定居宅介護支援事業所もあり、ケアマネージャーが常駐している。健康相談・医療・病院・施設など福祉サービスの情報も提供できるようにする。
　「病気の中には、薬局で購入する薬だけではだめなものも多いです。そんな時、どこに聞けばいいか、近隣の病院や施設などのネットワークがあって連携がとれたら、すぐ対応できます。お客さまの役に立てる。とても喜ばれると思うのです。」
　若い社員には高齢者介護は経験もなく、ぴんとこない部分も多いだろうという。本来の業務のほかに繰り返し研修も行わなくてはいけない。特別養護老人ホームを見学に行ったり、社員のヘルパー資格取得も任意で勧めている。
　「店舗の中に一人でも資格者がいれば、その人がリーダーシップをとって、進めていくことができる。」

また、ツルハでは今年、札幌・旭川で職員だけでなく一般に向けても、通信制の「ホームヘルパー3級無料講習会」を実施。約600名もの応募があった。スクーリング（実技）は社会福祉の専門学校に依頼して行った。そのほか、以前から行っていた健康セミナーは継続して行っていくという。

「お客様に対するサービスの一環になることなら、何でもやりたい。美・健康をコンサルタントするという役割はドラッグストアとして当然の役割です。充分にカウンセリングして納得して選んでいただくことが私たちの務めです。勝手に選んでというコンビニ的販売は、本来の薬局としての姿ではないですから。」

ツルハ医療介護サービス協会と介護相談事業を充実させるという会社あげての方針に、なぜか店頭での従業員の笑顔もよりやさしく感じてしまう。困った時は、頼りになるホームドラッグストアで気軽に質問してみよう。

問合せ：株式会社ツルハ
札幌本社/札幌市東区北24条東20丁目
TEL　011・783・2755
FAX　011・783・2981
URL　http:/www.tsuruha.co.jp